

AV アンプ 音質比較

Pioneer SC-LX87



Pioneer のフラッグシップ AV アンプ SC-LX87、YAMAHA から久しぶりに発売されたセパレート AV アンプ、CX-A5000、MX-A5000、AIRBOW カスタマイズ AV アンプ SR6008 Special、6ch パワーアンプ RMB-1506 Special、を AIRBOW UD7007 Special や高音質 Linux サーバー、AIRBOW SSS-2013 と組み合わせて音質を比較しました。また、それぞれの DSP（疑似サラウンド機能）の音質や DLNA 接続時の音質も比較しました。



Pioneer SC-LX87

希望小売価格 ¥333,334



定格出力 : 190W×9 (6Ω) ●映像入出力 ◆HDMI : 入 ×9、出 ×2 ◆色差 : 入 ×3、出 ×1 ◆COM 映像 : 入 ×4、出 ×2 ●音声入出力 ◆RCA : 入 ×6、出 ×1 ◆同軸デジタル : 入 ×2 ◆光デジタル : 入 ×2、出 ×1 ◆ヘッドホン : 出 ×1 ◆プリ : 出 ×1 (11.2ch) ●サイズ : W435×H185×D441(mm) ●重量 : 18.0Kg ●消費電力 : 370W ●仕上げ : ブラック

最初に AIRBOW UD7007/Special と HDMI 接続 (audioquest HDMI diamond) して音質をチェックしました。

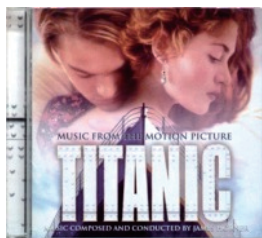


Carpenters Greatest Hits 10曲目
「Jambalaya」 / CD
ソフト
モード：レクト
YAMAHA RX-A3030
や CX/MX-A5000 と比較すると、配線を短く

して出力素子を基盤に直付けしたデジタルパワー回路

が効いているのでしょう。音の押し出しがシッカリしています。特に低音の量感と力感は RX-A3030 を凌ぎ、CX/MX-A5000 さえ上回るほどに感じられます。高域はしっとりというよりもクッキリした感じです。うるさくはありませんが、やや強く感じます。しかし、それに負けないシッカリした力感と密度感が中低域に与えられているのでバランスが高域に寄ることはありません。電源投入直後は潤いや艶が不足して綺麗だけれど単調

に感じらた音の表情も、24 時間以上連続して鳴らしていると細やかに再現されるようになりました。SC-LX87 の音は弾んで明るいイメージが強い音でこの曲を鳴らします。YAMAHA では少し「暗い曲調」に感じられたメロディーが「晴れやかで快活」に感じられるのは SC-LX87 最大の長所です。このアンプは、音楽を聞くことを楽しくしてくれます。



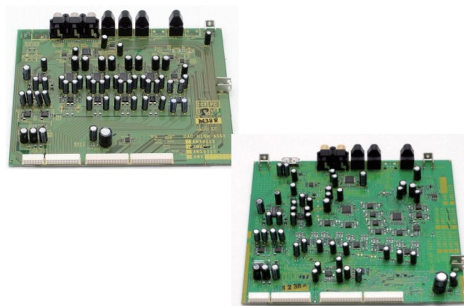
Original Sound Track
"TITANIC" 1 曲目
「Never An Absolution」
/ CD/SACD/SACD
Multi (3 層録音)
レイヤー : SACD(2ch)
タイタニックのイントロからも SC-LX87 の

「明るさ」が伝わります。

タイタニックのメインテーマと言うことを考慮すれば、この音は「少し明るすぎる」イメージです。これから「楽しい映画が始まる」ことを予感させられるような楽しい

く明るい音でタイタニックが少し「ディズニー」のようなイメージで鳴ります。よく言えば「明るく快活」で悪く言えば「やや軽薄」ですが、再生される音の細やかさやレンジの広さはたいしたもの、Pioneer のピュア 2ch プリメインアンプ「A-70」よりも私には遙かに好ましく感じられる音作りです。曲が進んでも豊かな中低域の効果で「エネルギーに満ちた音が部屋いっぱいに広がり」スクリーンのサイズに負けない豊かな音場が実現します。2ch の再生 (2 本のスピーカー) でこれだけ高密度に大きく音が広がれば文句はありません。

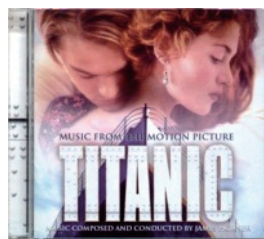
「明るすぎる」・「軽薄」などと悪口も書きましたが、それは必ずしも欠点とは言えません。暗くジメジメした音で音楽を聞き映画を見たいのであれば、SC-LX87 の持つ明るさはむしろ好ましいからです。後日 SC-LX87 の音を決めた主任エンジニアとお話する機会がありました。A-70 と余りに音が違うので、ピュア 2ch と AV アンプははっきり別人が開発していると思ったのですが、同一人物の音決めでした。そこで、色々と突っ込んだ質問をぶつけてみたのですが、それぞれに納得できる返答が得られました。その中で、これは紹介しておきたいと思う技術を簡単に紹介しておきたいと思います。



上の写真左は、SC-LX86 のデジタル回路基板です。右が SC-LX87 の基板です。左の基板では部品が整然と並べられています。このような形状を採用すると、設計・製作がやりやすいのは自明です。では、なぜ右側の SC-LX87 の基板では部品の配置がランダムに変更されているのでしょうか？キープポイントは「配線の長さ」です。SC-LX87 の基板設計では、各チャンネルへの配線の長さができるだけ均一になるように部品が配置された結果、見た目は「ランダム」になりました。しかし、電気的には「整理整頓」された配置で、その分音質が向上しています。こういう小さな部分にまで配慮され、SC-LX87 の音質は進歩しています。



上の写真は、SC-LX87 のパワーアンプ基板です。上から「スピーカー出力端子」、その下の黒い箱が「切り替えリレー」、その下に 6 個並んでいる大きなコンデンサーが、電源供給用の補助コンデンサーです。ここにコンデンサーを付けることで電源から離れた分の電源供給力を補えます。その下の白い箱の手前にある 12 本の背の高いコンデンサーがブリ回路の電源デカップリング・コンデンサーです。その下の黄色い線で囲まれた銀色のパーツが基板に直接取り付けられた「出力素子」です。音質を改善する目的で、それぞれのパーツが可能な限り最短距離で凝縮して取り付けられているのがわかります。SC-LX87 の音質へのこだわりを示す基板です。



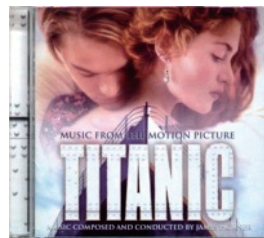
Original Sound Track
"TITANIC" 1 曲目
「Never An Absolution」
/ CD/SACD/SACD
Multi (3 層録音)
レイヤー：SACD マルチ (DSD Surround) モード：Direct

2ch でさえ十分なきめ細かさを持つ音がサラウンドだと

さらに濃密になり、ひととき大きく広がります。これだけの音が出れば、11.2ch やセパレート AV アンプは「不必要」だと思えます。直接は比較していませんが、SC-LX85/86 と比べて中低音の厚みが強化されていることは間違いありません。また、中低音の強化に伴って「やや薄く感じた感情の表現力」が「濃く」になっていることも見逃せません。SC-LX87 で強化されたのは目先の機能ではなく、中身の充実だとその音から伝わってきます。サブウーファ－

の追加をまったく感じさせない豊かな中低域が、このクラスの AV アンプから再現されるのは驚きです。YAMAHA 製品の持ち味は、DSP の効果とスピーカーの数を増やせば増やすほど音が良くなる性質でした。SC-LX87 はそれよりも少ないスピーカーの数で同等以上の音質を実現する高い実力を持っています。アンプの機能をいろいろ弄って楽しみたいのであれば、シンプルな構成で高音質が実現する Pioneer SC-LX87 がおすすめです。

接続を Ethernet(LAN) に変え、AIRBOW SSS-2013 に収録した楽曲を聴いてみました。



Original Sound Track
"TITANIC" 1 曲目
「Never An Absolution」
/ CD/SACD/SACD
Multi (3 層録音)
リッピング形式：WAV
(44.1kHz/16bit)
モード：ステレオ・

音色は心なしに「明るさ」が抑えられ、ニュートラルに近づきました。

再生しているファイル形式は「WAV/CD のリップファイル」ですが、直前に聞いた UD7007 Special HDMI 接続の SACD とほとんど変わらない高音質が実現してい

ます。驚くべき音の細かさと広がり、の豊かさ。地を這うような低音もきちんと再現されます。YAMAHA CX/MX-A5000 では「CD の再生」と「SACD の再生」で音質に大差があったのですが、SC-LX87 は入力されるフォーマットによる音の違いをほとんど意識させません。これは SC-LX87 のデジタル回路が非常に良くできている証拠です。つまり、入力されるデジタルデータに欠落（圧縮）があったとしても、回路がそれを上手く「補間（修正）」できているのです。実際ウォーミングアップ中はずっとインターネットラジオを聞いていたのですが、所有している CD とほとんど変わらない音質で楽しめたことに驚かされました。これだけのデジタル-アナログ変換の能力があ

れば、どんなディスクを再生しても納得できるサウンドが得られると思います。「やや明るめの音」も音楽をより聞きやすくしてくれると思います。

モード：疑似サラウンド

SC-LX57 のテストでは芳しい結果を残せなかった、疑似サラウンドプログラムですが SC-LX87 では「使える」ものになっています。YAMAHA ほど自然な感じはありませんが、SC-LX57 のように強い違和感を覚えるものでもありません。曲によってはあった方が良いかもしれませんが、使わない方が良いかもしれません。タイタニックに使った感じでは、音場が「濃く」なる感じと「身体が音に包まれる感じ」がより強くなり、結果としては良かったと思います。

試聴後感想

各社の一体型 AV アンプのフラッグシップが 20 万円前後に変わりつつある中で SC-LX87 はひととき高額です。その価格差が音質に反映されているかどうか？やや心配もあったのですが、それは杞憂に終わりました。SC-LX87 の美点は「中低域の厚みとエネルギー感」にあります。十万円～数十万円程度で販売される多チャンネルパワーアンプの低音は「本格的なパワーアンプ」に及ばないのが普通です。しかし、SC-LX87 はこのサイズのマルチチャンネル（サラウンド）アンプでありながら、本格的なパワーアンプ並の中低音の厚みとエネ

ルギー感を実現しています。中低音に定評のある SC-LX85/86 と比べても SC-LX87 の中低音は明らかに一回り以上充実しています。またデジタルアンプを搭載する関係で、アナログアンプのそれと比べて「やや薄かった音の艶や表情」が SC-LX87 ではグッと「濃く」なっています。音の広がり感も、やや平面的で薄っぺらい音だった以前の Pioneer の AV アンプとは見違えるほどの違いがあります。サラウンドアンプではなく、2ch ピュアオーディオ・プリメインアンプとして使っても現在発売されている Pioneer

A-70 よりも断然優れていると思います。例えば CD を 2ch で聞くのであったとしても、私ならアンプには A-70 ではなく SC-LX87 を選ぶでしょう。SC-LX87 があれば、ご家庭での 2ch/ サラウンドの音楽 / 映画シーンは十分充実します。ピュアオーディオ機器と比べると機能の割にやや「安く」感じられるかも知れませんが、この性能があれば B&W 803/802 クラスのスピーカーまで十分鳴らせると思います。Pioneer S-1EX はもちろん、TAD E1 と組み合わせても大丈夫でしょう。

AV アンプ 音質比較

YAMAHA CX-A5000 MX-A5000

11.2ch サラウンドを搭載する YAMAHA のセパレート AV アンプです。プリアンプ部は RX-A3030 をほぼそのまま踏襲し、電源や回路などに余裕を持たせています。パワーアンプは 170W×11ch の構成です。

プリアンプを CX-A5000 に変えることで音質は改善します。しかし、RX-A3030 に RX-A5000 だけを追加しても思うように音質は改善しないかも知れません。試しに AIRBOW RMB-1506 Special、SR6008 Special（プリアンプとして使用）と CX/MX-A5000 をスクランブル試聴すると MX-A5000 が音質のボトルネックだと分かりました。



YAMAHA CX-A5000



希望小売価格 ¥ 250,000

プリアウト：11.2ch RCA/XLR 各 1 系統●映像入出力◆HDMI：入 ×8、出 ×2◆色差：入 ×4、出 ×1◆S 端子：入 ×4、出 ×1◆COM 映像：入 ×5、出 ×2●音声入出力 RCA：入 ×9、出 ×3◆同軸デジタル：入 ×3◆光デジタル：入 ×4、出 ×1◆フォノ：入 ×1◆ヘッドホン：出 ×1●サイズ：W435×H192×D448 (mm)●重量：13.6Kg(1 台)●消費電力：80W●仕上げ：ブラック、チタン

YAMAHA MX-A5000

希望小売価格 ¥ 300,000



定格出力：170W×11（同時出力時）●音声入力：RCA×11 XLR×11●サイズ：W435×H210×D463.5(mm)●重量：25.4Kg●消費電力：650W（無信号時：75W）●仕上げ：ブラック、チタン



YAMAHA が試聴用に準備していたバランスケーブルで接続して音質をチェックしました。



Carpenters Greatest Hits 10 曲目
「Jambalaya」 / CD
ソフト
モード：ステレオ・ダイレクト
明るく楽しい音で音楽が弾みますが、中高域

に若干の濁りを感じます。カレンの声も少し力が弱いように感じます。それを除けば全体的な印象は、前にテストした RX-A3030 にかなり近いイメージです。中低域の厚みと押し出し感にセパレートアンプらしい力強さを感じます。YAMAHA の最新型プリメインアンプ、A-S3000 と比べると如何にセパレートアンプとは言え明らかにピュア

オーディオアンプと AV アンプの差を感じます。しかし、同じ YAMAHA の AV アンプと比較するなら、2005 年以前のモデルとはきめ細かい中高域や中低音の厚みで隔世の感があります。耳の肥えたピュアオーディオファンでなければ、十分満足できると感じられる音質でカーペンターズが鳴りました。

モード：疑似サラウンド（Scene1）

RX-A3030 もそうでしたが YAMAHA の AV アンプは、ステレオソースでも 2ch で聞くよりサラウンド化することで明らかに音質が向上します。ステレオダイレクトの音が 5-10 万円程度のプリメインアンプに当てはまるなら、DSP を使いサラウンド化することでその音質は 10-20 万円のアンプに匹敵するほどに向上します。ピュアオーディオを経験している人には、スピーカー

を擬似的に増やすと音が良くなることを理解しにくいかも知れません。しかし、スピーカーが 2 本から 5 本に増えたスピーカーに、正しく演算された（作り出された）正しい響きが入力されることで、音の数（情報量）は確実にアップします。フルレンジよりも 2Way、2Way よりも 3way スピーカーの方が音が細くなるのと同じ理屈です。センターとリアからはアンプが作りだした音が出力されますが、不自然さはまったく感じられません。

2ch ソースをサラウンド化することで身体を包み込むような自然でリアルなライブ感が得られます。また、2ch では若干不足気味に感じられたエネルギー感も向上し、カレンの声にも元気が出ました。私なら、YAMAHA の AV アンプを使うときは DSP を常に ON にして音楽を楽しむと思います。



Vienna Acoustics
Beethoven
Concert Grand

希望小売価格
¥350,000 (1本)



Vienna Acoustics
Beethoven
baby Grand SE

希望小売価格
¥300,000 (1本)

使用スピーカー



フロントスピーカーは、Vienna Acoustics Beethoven Concert Grand(T3G)

センタースピーカーは、AIRBOW IMAGE11/KAI2

リアスピーカーは、Vienna Mozart Concert Grando (T2G)

※サブウーファーは未使用です。



AIRBOW
IMAGE11/KAI2

希望小売価格 ¥22,500 (1本)



Original Sound Track
"TITANIC" 1曲目
「Never An Absolution」
/ CD/SACD/SACD
Multi (3層録音)

レイヤー：SACD(2ch)

CX/MX-A5000を使うと、サラウンドで再生でなくてもリスニングポジション背後まで音が深く回り込みます。これは、広がりを司る微細なエコー（消えゆく響きの成分）まで再生されている証です。きめ細かくレンジも広いサウンドです。CDよりもSACDは

明らかに高音質ですが、A5000がその音質差をきちんと反映できるのはアンプそのものの基本的なS/Nが高い証拠です。カーペンターズのCDを聞いた時にも感じましたが、中高域のノイズ感がほぼ完全に解消したA3030/A5000は、2005年以前のYAMAHA AVアンプの音質から完全に脱却し、劇的に良化しています。

SACDにソースを変えても、中高域の透明感ではYAMAHA最新ビュアオーディオS3000 Seriesには及びませんが、音質ははっきり向上しました。

レイヤー：SACD マルチ (DSD Surround)

A5000で再生するDSD/Multiのサウンドは、初期のビュアオーディオSACDサラウンドを確実に上回ります。

CDの再生時に気になっていた中高域の濁りは完全に消え、非常にきめ細やかな音が部屋いっぱいに広がります。パワーアンプの力にも余裕が感じられ、ダイナミックレンジはビュアオーディオ製品と変わりません。漂うようなエコーの美しい響きと、消えゆく部分の静けさ、地を這うような低音の深さがきちんと再現されます。A5000を購入して、始めて再生するソフトがタイタニックSACDのサラウンドなら、A5000を選択・購入なさったことを心から喜べると思います。良い音です。

接続をEthernet(LAN)に変え、AIRBOW SSS-2013に収録した楽曲を聴いてみました。



Original Sound Track
"TITANIC" 1曲目
「Never An Absolution」
/ CD/SACD/SACD
Multi (3層録音)

リッピング形式：WAV
(44.1kHz/16bit)

モード：ステレオ・ダイレクト

まず2chステレオで「素」の音を聞いてみました。絶対的な音質では、UD7007 SpecialをHDMI接続して聞いたカーペンターズのCDと比べ若干ですが、中高域の透明感やきめ細やかさが下回っているように感じました。しかし、同一ソフトで比べていないので絶対ではありません。少なくとも高音質Linux (MSHD/I-Cat Inc)を搭載するAIRBOW SSS-2013を使う限り、ネットワーク経由のサウンドがBD/DVDプレーヤーを下回ると思うことはなさそうです。

モード：疑似サラウンド (Scene1)

次にCDの再生でも良好だったサラウンド (疑似)にモードを変更してみました。

驚いたことにSACD/Multiと大きな差が感じられません。音が消える部分の静けさや、高域の澄み切った透明感などがほんの僅かに後退しましたが、SACDマルチに匹敵するほどの凄い音質です。

試聴後感想

UD7007 SpecialにCDをセットしケーブルにaudioquest HDMI Diamondを使って音を出した瞬間は、正直RX-A3030からセパレートに買い換えるほどの差はないと感じました。確かに中低音の力感や厚みでは明らかにRX-A3030を超えていましたが、中高域に質感に思うほどの大きな差を感じられなかったからです。しかし、ディスクをSACDに変えるとA5000 SETの音質は飛躍的に向上しました。例えるならその差は、ハ

イビジョンでない番組とフルハイビジョンを比べたくらいの大きな差があると思います。とにかく入力されるデータ良ければ良くなるだけ、A5000 SETはその真価を発揮します。

また、通常のCDでもDSPを使った場合の音のきめ細やかさなどで、A5000 SETはRX-A3030を凌駕するように思いました。少なくとも、一般に市販されてきたAVサラウンドアンプとしては最も高音質な製品に仕上

がっていると思います。

また、marantzのAVアンプとの比較では、メリハリがあつて元気なmarantzに対しYAMAHAはきめ細かく質感の高さを感じさせる音作りに感じました。ポップな音楽や映画にはmarantz、クラシックのような深みのある音楽や古典映画の試聴にはYAMAHAが適しているのではないのでしょうか。

AV アンプ 音質比較

AIRBOW SR6008 Special RMB-1506



AIRBOW SR6008 Special

販売価格 ¥ 180,000

最大出力: 220W×7(6Ω) ●映像入出力 ◆HDMI: 入 ×6+1, 出 ×2 ◆色差: 入 ×4, 出 ×1 ◆COM 映像: 入 ×2, 出 ×1 ●音声入出力 ◆RCA: 入 ×7, 出 ×2 ◆同軸デジタル: 入 ×2 ◆光デジタル: 入 ×2 ◆フノ: 入 ×1 ◆ヘッドホン: 出 ×1 ◆プリアウト: 7.2ch×1 ●サイズ: W440×H161×D388(mm) ●重量: 11.2Kg ●消費電力: 650W ●仕上げ: ブラック



AIRBOW RMB-1506 Special

販売価格 ¥ 180,000

定格出力: 50W×6 ●音声入力: RCA×6 ●サイズ: W431×H144×D449(mm) ●重量: 15.3Kg ●消費電力: 450W ●仕上げ: ブラック、シルバー



この音質比較で使用した AV アンプ以外の製品



AIRBOW UD7007 Special

販売価格 ¥ 175,000～

AIRBOW オリジナル Linux サーバー「SSS-2013」は、標準で搭載する音楽再生ソフト「VLC Media Player」を使うことで、最大 192kHz までのハイレゾファイル HDMI 出力 (2ch のみ) できます。また、DLNA 経由であれば 192kHz までのハイレゾファイルに加え、dff 形式で記録された DSD ファイルの出力 (市販品では、バッファローよりも早く世界初、Pioneer 製最新型 AV アンプ) に対応しています。

AIRBOW SSS-2013

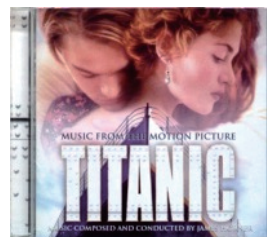
販売価格 ¥ 189,000



AIRBOW 高音質 / 高画質 ブルーレイプレーヤー UD7007 Special は、marantz UD7007 のパーツを大幅に交換しカスタマイズすることで、OPPO 製品を大きく凌駕する細やかで情緒豊かな音質、きめ細やかで奥行き深い映像を実現する現在最強のブルーレイプレーヤーです。marantz メーカー保証に準じる内容の保証が 24 ヶ月付き、さらにお買いあげ後万一製品がが気に入らない場合 30 日以内ならお買い上げ代金を全額返金させていただく「安心保証」も付いています。

接続を Ethernet(LAN) に変え、AIRBOW SSS-2013 に収録した楽曲を聴いてみました。

CX-A5000 の能力をさらに詳しく探るため、パワーアンプを AIRBOW RMB-1506 Special と組み合わせてみました。



Original Sound Track
"TITANIC" 1 曲目
「Never An
Absolution」 / リッ
ピング形式: WAV
(44.1kHz/16bit)
パワ アンプを
YAMAHA RX-A5000 か
ら AIRBOW RMB-1506 Special に変えると、高域の伸び

やかさ、色彩の美しさ、透明感がさらに向上しました。AIRBOW のカスタムアンプらしい色彩感の豊富な艶を感じる音で RMB-1506 Special は、タイタニックをさらに深く鳴らします。きめ細やかさやデリケートな表現力が向上し、目をつむっていても映画のワンシーン・ワンシーンが走馬燈のように脳裏に浮かびます。最大出力こそ 50W に過ぎませんが、低音の量感はずいぶん向上し、ず〜〜んという音の深さと低さがより鮮明になります。海の底からの響きが立ち上ってくる、タイタニックのサウンドトラックらしいリアリティーをより強く感じます。楽器の音もより明確です。使われている楽器の種類や銘柄までも感じ取れるような「楽器から出ている音が

そのまま」に聞こえます。ピアノシモからフォルテシモへの変化の鮮やかさにも曇りがなく、スパッと音色が鮮やかに切り替わるのは聞いてきて気持ちが良かったです。プリアンプを YAMAHA CX-A5000 から変えず、パワーアンプだけを AIRBOW RMB-1506 Special に変えるだけで、出てくる音はほぼ完全にピュアオーディオのそれになりました。私はシンプルな回路に純度の高いパーツを組み合わせた製品がだけが持つピュアな音、デリケートでニュアンスが深いこの音の方が好きですが、「クオリティー」の点でも誰が聞いても違いが分かるくらいは十分にあると思います。音が磨かれ、感動がより鮮やかに伝わりました。

Special

CX-A5000 と MX-A5000 を YAMAHA が試聴用に準備していたバランスケーブルで接続して音質をチェックしました。

次にパワーアンプを YAMAHA MX-A5000 に戻し、AIRBOW SR6008 Special をプリアンプとして組み合わせってみました。



Carpenters Greatest Hits 10 曲目
「Jambalaya」 / CD
ソフト
モード：ステレオ・ダイレクト

カーペンターズの CD を聞く度に、このソフトのカレンの声を暗く、重くならないように鳴らす事が難しいと感じます。しかし、A5000 SET で気になって

いた中高域の曇り感が消えました。カレンの声も少し太くなり、元気が出てほっとしました。

高域は AIRBOW カスタムアンプと聞いて感じるほどは伸びていませんが、YAMAHA CX-A5000 で聞いた時と比べ濁りが解消し透明感が向上しています。中域の躍動感や楽器それぞれの音色の違い、人間の声色の違いは SR6008 Special が CX-A5000 よりも鮮やかで分離感も上々です。霧が晴れたように音場の見通しが良くなると共に、中域が暖かくなって人間らしい血の通った音に変わりました。

SR6008 Special は一体型の AV アンプですがそのプリアウトの音質も素晴らしく、YAMAHA MX-A5000 との組み合わせで CX-A5000 よりもさらにきめ細かく、バランスの良い音質でカーペンターズを楽しく、情緒豊かに

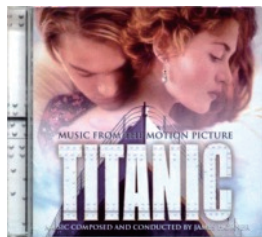
に鳴らしてくれました。

モード：疑似サラウンド (dts)

疑似サラウンドを使うと、音がひときわ大きく広がります。しかし、YAMAHA CX-A5000 が搭載する DSP の緻密で自然な音を聞いた後では、SR6008 Special のエコーがやや人工的に感じられることも事実です。

AIRBOW 単体のテストでは、その「不自然さ」にはほとんど気がつかなかったのですが、SR6008 Special を責めるよりは YAMAHA CX-A5000 を褒めるべきだと思います。やはり YAMAHA は DSP が優秀です。

SR6008 SP+PW で聞く 2ch と YAMAHA で聞く DSP のサウンドは結構拮抗していると思います。楽しさや楽音の色鮮やかさでは AIRBOW が、緻密さや密度感では YAMAHA が勝るように思います。



Original Sound Track "TITANIC" 1 曲目
「Never An Absolution」 / CD/SACD/SACD
Multi (3 層録音)
レイヤー：SACD マルチ (DSD Surround)

ディスクを SACD に変えても高域の透明感、伸びやかさで SR6008 Special (プリアウト) が YAMAHA CX-A5000 を上回ります。

高域の頭打ちをまったく感じさせずどこまでもクリアに伸びて行く高域と、十分な量感と力感を伴う低域。そして、低音が高音よりもほんの僅かに遅れることで、それぞれの存在感が増す印象です。

YAMAHA A5000 SET を高画質 TV に例えるなら、AIRBOW のサウンドはフィルム映画です。絶対的な濃さでなく、淡さの質感やグラデーションの高さを感じさせるピュアオーディオ高級機を彷彿とさせる、より本格的でマニアックな音に仕上がっています。

YAMAHA は良くできています。以前なら AIRBOW カス

タムモデルとメーカー製品の間には「絶対的な音質差」が感じられましたが、それはすでに過去のものとなり、少なくとも表面的な音質の範囲で AIRBOW SR6008 Special と CX-A5000 に大差はありません。

しかし、フィルムとデジタル映像の違いを求めるのであれば、本物の質感や表現の深さを音質に求めるなら、やはり AIRBOW しかないと感じるのも事実です。

どちらを選ぶか？好みだと思いますが、映画館で上映されるフィルム映像を見る良さが AIRBOW に感じられました。

試聴後感想

高価なセパレート AV アンプ A5000/SET が RX-A3030 に勝るのは中低域の厚みと力感ですが中高域の緻密さや音の細かさに大差があるわけではなく、音質の違いはそれほど明確でないかも知れません。また全体のバランスでは一体型の RX-A3030 に A5000/SET を上回る部分を感じます。コストパフォーマンス、スペースファクターを考えるなら、RX-A3030 が間違いのない選択です。

しかし、DSP の精度の高さ、ハイレゾ (BD) DSD (SACD) のような CD よりも上位のフォーマットを入力すると A5000/SET はその真価を発揮します。CD と SACD の音の違いは結構ありますし、また DSP を使ったときの音質改善幅も非常に大きく、これらの点では RX-A3030 を確実に凌ぎます。

今回の音質テストの結果を踏まえて考えると、通常のご家庭で 5.1-7.1ch の範囲でサラウンドを楽しめるならば、一体型の RX-A3030 が最適で、最大 11.2ch までスピーカーの数を積極的に増やすことをお考えならば、セパレートの A5000 がお勧めめと言うことになります。YAMAHA MX-A5000 と AIRBOW RMB-1506 Special の比較では、文句なく後者が高音質でした。MX-A5000 が

サラウンド用パワーアンプという音質の範囲を出ないのに対し、RMB-1506 Special は明らかにピュアオーディオの音質に仕上がっています。パワーが少ないにもかかわらず、低域の力感も RMB-1506 が上回ります。さらに、中高域から高域にかけての滑らかな質感、豊富な色彩感では RMB-1506 Special が MX-A5000 を圧倒しました。ただし、MX-A5000 が 11ch、RMB-1506 Special

が 6ch (つまりパワーアンプの数が半分) という理由も大きいと思います。あえて、11ch まで必要がなければ 10 万円を切る価格で販売している「Rotel RMB-1506 (AIRBOW RMB-1506 のベースモデル) も相当良くできたアンプなので価格を抑え音質をキープするためこちらを使うという手もあります。CX-A5000 を 5.1ch もしくは 6.1ch の範囲でお使いの予定であれば、パワーアンプには MX-A5000 よりもチャンネル数の少ない Rotel や AIRBOW RMB-1506 Special が有利なようです。価格も安く、MX-A5000 以上の音質が得られるはずですが。

YAMAHA CX-A5000 と AIRBOW と SR6008 Special の「プリアウト音質」の比較では、パワーアンプほど圧倒的・決定的な大差はないという結果になりました。音の緻

密さや密度感では CX-A5000 が SR6008 Special を上回りますが、それはデジタル回路に AIRBOW SR6008 Special よりも高性能 (高価) な素子が使われているからでしょう。

それに対し、出てくる音の伸びやかさ、自然な広がり感、ニュアンスの深さやデリケートさでは SR6008 Special が CX-A5000 を凌駕します。それは、SR6008 Special のベースモデル、SR6008 に marantz が採用しているピュアオーディオ機器と等価のプリアウト回路 HDAM のパーツを SR6008 Special は、すべてピュアオーディオグレードの高音質品に交換し、ピュアオーディオと同等の音質感を AV アンプで実現しているからでしょう。アナログ回路の良さを勝る SR6008 Special に対しデジタル回路の良さで勝る CX-A5000 という感じですが。出てくる音も AIRBOW= フィルム的、YAMAHA= デジカメ的と製品が持つ特長をそのまま反映していました。

フィルム映像的な質感を音に求められるのであれば AIRBOW。デジタル映像的なわかりやすさを音に求められるのであれば YAMAHA という選択で正しいと思います。

AV アンプ 音質比較



AIRBOW SR6008 Special（内蔵アンプを使って音質をチェック）



Carpenters Greatest Hits 10 曲目
「Jambalaya」 / CD
ソフト
モード：ステレオ・ダイレクト
低音の量感や力感は及びませんが、中高域の

明瞭度、濁りの少なさ、カレンの声の元気の良さで SR6008 Special が CX/MX-A5000/SET を上回ります。しかし、その低音も量感や押し出しこそ A5000/SET には及びませんが、リズムカルに弾む感じはこちらの方が上回ります。フルートの音色も切れ味が良く、音楽全体が楽しく躍動します。密度感やレンジ感も思ったほど低下せず、リッチな中

域を中心に上下がやや下がった「かまぼこ形のバランス」で音が見事にまとまっています。スピーカーからよほど離れなければ高音も低音もシッカリ聞こえますから、15 畳を大きく超えるような広い部屋でなければ AV アンプは SR6008 Special や RX-A3030 のような一体型で十分な音質が得られると思います。今回テストした中で、SR6008 Special の単体使用が音楽を最も安心して楽しめました。



COriginal Sound Track "TITANIC" 1 曲目
「Never An Absolution」 / CD/SACD/SACD
Multi（3 層録音）
レイヤー：SACD マルチ（DSD Surround）
音を耳で聞くのではなく、音を作るイメージが身体の中に浸透するような鳴

り方をします。SR6008 Special でタイタニックを聞いていると、映画のワンシーンワンシーンが脳裏に鮮やかに蘇ります。これ以上何が必要なのか？そういう完成された良さを音に感じます。確かに絶対的な音質を云々するのであれば、内蔵アンプと外付けパワーアンプには確実な差があります。しかし、音楽に浸る、映画に没頭するという意味であれば、両者にはそれほど大きな差はありません。そればかりか、音の整った感じや音場に溶け込める一体感では、

CD と同じく SACD マルチを聞いても、SR6008 Special 単体での試聴がベストでした（※SR6008 Special と RMB-1506 Special の組み合わせなら、SR6008 Special の単体音質を凌ぎますが）。感動を伝えるう能力では、SR6008 Special 単体使用が今回試聴した中で最良です。音が良くなれば、すなわち感動が深まるというわけではないことを AV アンプでも再認識する結果となりました。音はバランスです。

試聴後感想

CX/MX-A5000/SET と RX-A3030 との比較でも感じましたが、AV アンプをわざわざセパレート（2 台 / 筐体）にするメリットはそれほど大きくないと思います。確かに AV プリアンプは、パワーアンプと分離することで大幅に音質がアップします。しかし、数十万円程度で売られている多チャンネルのパワーアンプはやはりコスト面や一つの筐体に多数のパワーアンプを収納しなければならない限界か、プリアンプ部と分離しても内蔵アンプとさほど大きな差が感じられないからです。

MX-A5000 も 30 万円 ÷ 11ch = 27,000 円 /ch と考えると、驚くべきコストパフォーマンスを感じさせるアンプです。しかし、私達オーディオマニアが聞いているパワーアンプは、最低でも 10 万円オーバー /ch のコストで作られています。CX-A5000 が一体型 AV アンプに備わる「プリアウト」を大きく超える音質を実現していることを考えるならば、AV セパレートアンプを高音質で楽しむには、可能なら高音質ステレオパワーアンプを使うべきでしょう。しかし、すべてを高音質パワー

アンプで購おうとすれば予算や置き場所かなりの余裕が必要になります。それなら、MX-A5000 をステレオパワーアンプ × 2、もしくはモノラルアンプ 3 台を組み合わせて、フロントとセンターは高音質パワーアンプで、その他のチャンネルは MX-A5000 という使い方が理にかなっていると思います。また、そのような発展した使い方をして頂くことで、CX-A5000 の高音質がぐっと生きると思います。

YAMAHA と言い、marantz/DENON と言い、Pioneer と言い、最近の AV アンプの実力向上には目を見張るものがあります。どれを選ぶか迷われると思いますが、marantz も含めすべて「標準以上の音質」は実現していますから、どれをお選びになっても「後悔」はなさらないと思います。もちろん、一番のお気に入りには中低音の力感 SC-LX87 に譲っても、アナログらしい音楽の表現力や音の表情の豊かさでそれを超える AIRBOW SR6008 Special であることに変わりありませんが、一般的な市販 AV アンプの中で高音質を望むのであればサイズ（置き場所）なども考慮して SC-LX87 がお勧めです。最後に試聴中気づいた事について触れてみます。最近の試聴レポートの写真を写真をご覧頂ければおわかりになるとと思いますが、機器のテストでは必ず「きちん

とした置き台」を使っています。これは TAD Reference System の試聴会を重ねる中でインシュレーターの重要性を再認識したからです。TAD の Reference Power Amplifire、M600 は脚の下にインシュレーター（AIRBOW Metal Base L/King）を使うのと使わないのでは、まったく出てくる音が違います。それは、精々数百円程度の汎用スピーカーケーブルをオーディオ用の高額品に変えたくらいの大きな差なのです。これまではカーペットの上に Krypton AB-G3500 を於いてその上に機器を設置していたのですが、TAD イベントで音が良かった「J1 Project と AIRBOW Metal Base」の組み合わせを「置き台」として使うようにしたのです。そうするとあらゆるアンプの音質が半端じゃなく向上しました。今回のテストでも「置き台なし」では、まあこれくらいかな？という音が「置き台を使う」ことで、

これはいい！くらい大きな変化がありました。特別な置き台を使ったことで、今回のテストではどのモデルも「素」よりも良い音が出ているかも知れません。しかし、お借りした試聴機の良さをより大きく引き出したい（メーカーのためにも良い評価をしてあげたい）という思いと、AV アンプとピュアオーディオ機器の差をできるだけ埋めたいという気持ちから、今回はきちんとした置き台を使って試聴を行いました。あなたの想像を遙かに超えて、「置き台」は AV 機器の音質改善に驚くほど有効です。しかし、今回使った J1 Project はすでに生産完了してるので、それを超える置き台として AIRBOW から「Beet Board」と名付けた置き台を発売することにしました。※詳細は近日発表の予定です。